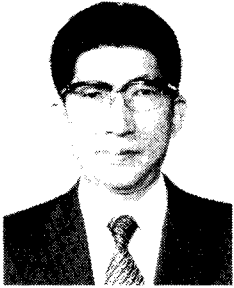


新しい年を迎えて

日本熱測定学会会長 菅 宏
大阪大学理学部教授



このたび谷口前会長の後を受け、委員会のご推挙により計らずも会長の重責を担うことになりました。1992年の新春を迎え、まずは会員の皆様にご挨拶を申し上げます。

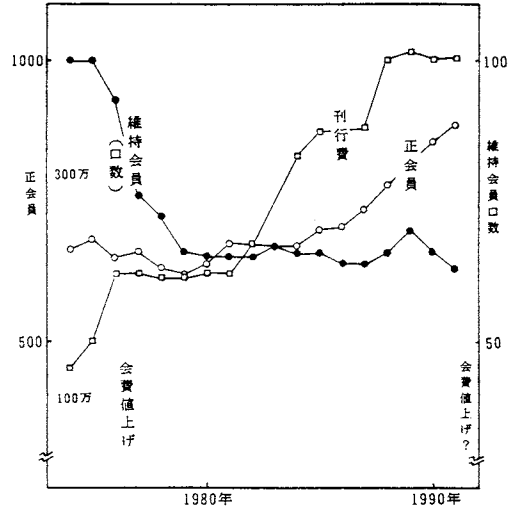
第18回通常総会の時にも申し上げましたが、学会の健全な運営は委員の方々は

勿論のこと、全会員のご協力なしにはかなわぬこと、改めて皆様のご鞭達とご協力のほどをお願い申し上げる次第です。とりわけ、今年度は最初から赤字予算で発足せねばならぬという、1974年の学会発足以来の始めての危機に見舞われています。

Think globally, act locally という言葉に従って、早速身の回りの資料から学会の財政状況を追ってみました。正会員は学会発足時より10年ほど横這いでしたが、ここ数年間は急上昇しており、この状態が続けば千人に達するの時間問題かと思われまます。これに対して維持会員の方は、当初の52社(100口)より数年のうちに35社(64口)に減り、以後横這いの状態が続いているのは、正会員数の消長と対照的です。発足時には会費収入の45%に達していたものが、現在では30%そこそこです。つまり、維持会員に対する学会サービスが不足していて、魅力を失わせた結果とも考えられます。

印刷費の占める割合は、他学会と同様に頭の痛い問題です。発足時には百万円台だったものが、オイルショックなどの影響で四百万円の大台に乗り、これだけで会費収入を越えることになりました。人件費増による事務局経費の伸びも無視できません。

不足分は、講習会などの事業費で賄われております。幸いこの企画は企業の研究者に対して人気があり、試料の特性評価や生産品の品質管理に対する熱測定の役割を認識して頂くと同時に、確実にこの分野の裾野を広げる機能を持っており、今後も活潑に進めることが望まれます。正会員数の伸びも、この事業と密接に関係しています。しかし、これだけでは不足です。発足時2千円であった会費は、1976年に3千円に値上げされましたが、以



会員数と出版経費の推移

降10年以上も据置かれているからです。会費値上げは避けて通れなくなりました。

加えて、IUPAC 化学熱力学国際会議誘致問題があります。第36回 IUPAC 総会での提案は、比較的好意をもって迎えられたようです。もしこれが実現すると、かなりの額の寄附金を集めなくてはなりません。昔と違って寄附もそう簡単ではなく、先ず自己資金を用意しなければ笑われるだけです。幸い、日中シンポジウムその他の学会事業に対して、熱測定振興会から頂いた基金の残額が積立てられており、これをその一部に充当することができますが、これとて充分ではありません。

このような状況を考えますと、act locally として会費の値上げをする前にやるべきことが幾つか考えられます。引継ぎの委員会で森田善一郎委員(日本鉄鋼協会会長)が提案されましたように、一人でも多くの会員、一口でも多くの維持会員口数を増やすことです。森田先生ご自身、口先だけでなく早速数名の新会員をご勧誘下さいました。また、本学会の行事のすべてに日本鉄鋼協会の協賛をお申し出下さり、百万人の味方を得た思いが致します。『入るを計って出るを制す』財政的危機に見舞われた時には、これしか手がありません。これを今年度の学会運営のモットーにしたいと思ひます。会員の皆様にも身の回りを見渡して是非ご協力賜わり、値上げの前に我々会員として成すべきことに全力を挙げようではありませんか。

年頭に当り、皆様方のご健祥と研究のご発展をお祈り申し上げると共に、所感の一端を述べさせて頂きました。